

熊本の部隊、第 6 師団歩兵第 13 連隊の太平洋戦争について

1 歩兵第 13 連隊の概要

熊本県出身の兵士が中心となった歩兵第 13 連隊は、第 6 師団の配下として日清、日露戦争から大陸戦線、太平洋戦争まで、さまざまな戦いに参加し、昭和 20 年に南太平洋ソロモン諸島のブーゲンビル島にて終戦を迎えた。

明治時代初期の陸軍草創期に熊本で編成され、明治 21 年に第 6 師団が創設されたのちはその隷下に入った。第 6 師団は熊本鎮台をもとに、主に九州南部の熊本県・宮崎県・鹿児島県出身者で構成された。熊本城に師団司令部が置かれ、歩兵 13 連隊（熊本）、歩兵 23 連隊（都城）、歩兵 45 連隊（鹿児島）を基幹とし、野砲兵第 6 連隊、騎兵第 6 連隊、工兵第 6 連隊などで構成された。

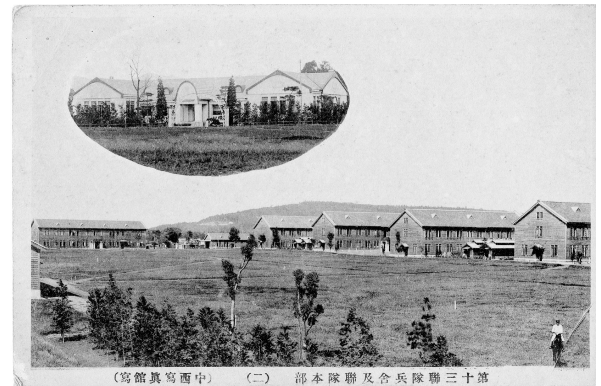
歩兵第 13 連隊本部は大正 14 年に熊本城周辺から大江に移転した。現在の熊本学園大学敷地は、元歩兵第 13 連隊の敷地であり、その周辺は第 6 師団のその他の連隊諸施設が整備されていた。歩兵第 13 連隊正門跡などが現在も残されている。昭和 12 年に始まった日中戦争では、徐州作戦、南京攻略戦、武漢作戦、長沙作戦などに参加し、大陸各地を転戦した。

2 ソロモン諸島ニューギニア島の戦い

太平洋戦争では、南方方面の作戦を担当する第 17 軍に編成され、昭和 18 年 1 月に大陸からラバウルへ進出した。ラバウルはパプアニューギニアのニューブリテン島東側に位置し、太平洋戦争が開戦して間もなく日本軍が占領し、港や飛行場を建設して南洋の拠点として整備されていた。

昭和 17 年、日本軍はラバウルの南島側にあるソロモン諸島の各島に飛行場を建設しながら勢力を拡大していたが、昭和 18 年初頭にガダルカナル島を巡る作戦が失敗に終わって以降、アメリカ軍は攻勢へと転じた。昭和 18 年 7 月上旬、ラバウルとガダルカナル島の間地点に位置するニューギニア島のムンダ飛行場に対して、アメリカ軍の部隊が進出した。これに対し、飛行場守備隊を支援するため、ラバウルから歩兵第 13 連隊が派遣された。7 月から 9 月にかけて、ムンダ飛行場周辺やアルンデル島、コロバンガラ島などで戦闘が行われ、連隊長友成大佐が戦死するなど激戦が展開されたが、勢力に勝るアメリカ軍に飛行場を奪取され、ブーゲンビル島に撤退した。

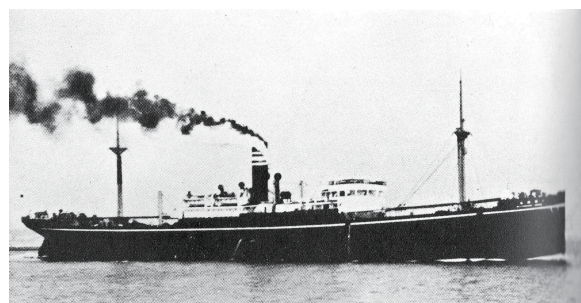
この頃、熊本の第 13 連隊司令部から兵員補充のため輸送船団が派遣された。しかし昭和 18 年 9 月 30 日、パラオからラバウルに向かう途中、北緯 06 度 01 分 東経 139 度 08 分付近（パプアニューギニアの北約 1000km）にて、輸送船前橋丸がアメリカ軍潜水艦ボーギーの雷撃で沈没し、将兵約 1000 名が死亡した。（この時の状況は、玉名市老連戦争体験集「永遠の平和を願って」とその再編集版である「ふるさとの太平洋戦争」に証言が収録されている。）



歩兵第 13 連隊の敷地内
熊本学園大学敷地などに利用されている



歩兵第 13 連隊の正門
昭和 6 年に熊本で行われた陸軍大演習時の写真



前橋丸

3 ブーゲンビル島の戦い

ブーゲンビル島は、ソロモン諸島で最大の島で、熊本県の 1.2 倍ほどの面積を有す。島全体が熱帯雨林のジャングルで覆われ、山がちで平野が少ない地形となっている。昭和 17 年、ガダルカナル島を巡る作戦を有利に進めることができるよう、ブーゲンビル島北側のブカや南のブインに飛行場が建設された。地上戦力は、ブインに第 17 軍司令部を置き、島全体に第 6 師団の各連隊などが展開していた。

昭和 18 年 11 月にタロキナ岬付近にアメリカ軍が上陸し、橋頭保を築き飛行場を建設するなどしたため、歩兵第 23 連隊を中心に攻撃をかけたが撃退できず、アメリカ軍はタロキナ周辺にブーゲンビル島における拠点を整えつつあった。

昭和 19 年 3 月、再びタロキナ周辺のアメリカ軍を攻撃する第 2 次タロキナ作戦が行われた。まだ無傷であった第 6 師団の歩兵第 45 連隊を主力に、第 13 連隊、第 23 連隊や温存していた野砲兵第 6 連隊などの砲兵力を動員した総攻撃であったが、アメリカ軍を撃退できず、多大な被害を出して後退した。

第 2 次タロキナ作戦後は、歩兵第 13 連隊を含め第 6 師団全体の戦力は大きく消耗した。将兵の多くが失われ、武器弾薬や食料も乏しく、飢えとマラリアなど病気に苦しんでいた。それでも島内に農園を開墾するなど、自給自足体制を整え、戦力維持に努めた。

昭和 19 年は、6 月にサイパン、グアム島陥落、マリアナ沖海戦で日本海軍機動部隊の敗北など、アメリカ軍は次第に攻勢を強め、フィリピンの戦いを経て日本本土を窺う様相となっていた。11 月にはソロモン諸島周辺の担当はアメリカ軍からオーストラリア軍と交代し、ブーゲンビル島ではオーストラリア軍第 2 軍団第 3 師団（第 7、15、29 旅団基幹）と第 11 旅団を主力とし、積極的に攻勢に出てきた。このため、昭和 19 年 11 月から昭和 20 年 4 月にかけて、プリアカ周辺で断続的な戦闘が行われた。タロキナからマウレカを経てオーストラリア軍が進軍し、歩兵第 13 連隊、23 連隊、砲兵第 6 連隊などと戦闘が行われた。

昭和 20 年 6 月以降は、日本軍は戦力を整理し、第 6 師団司令部のあるマイカ、ムグイア周辺を最後の拠点とし、ミオ川に沿って第 13 連隊などを配置して防衛線としながら、プリアカ方面からやって来るオーストラリア軍と攻防を繰り返していたところで終戦を迎えた。8 月 23 日、歩兵第 13 連隊はミオ川の東アクに集結し、そこで軍旗が焼かれた。

9 月 8 日、タロキナにて第 17 軍司令官とオーストラリア軍司令官との間に停戦の協定が結ばれた。将兵はブーゲンビル島から南東にあるファウロ島に移動させられ、そこでしばらく捕虜として生活したのち、昭和 21 年になって順次日本へ復員していった。

〈参考文献〉
熊本兵団史編さん委員会
1965 『熊本兵団戦史 太平洋戦争編』 熊本日日新聞社
熊本の戦争遺跡研究会編 2010 『熊本の戦争遺跡』 創想社
高谷和生 2020 『くまもと戦争遺産 戦後 75 年 平和を祈って』 熊日出版
木津重俊 1984 『日本郵船船舶 100 年史（世界の艦船・別冊）』 海人社

(文・図版作成 歴史文化デザイン研究所)

表1-1 主要作戦部隊戦没者概要（第 6 師団関係）
（全国ソロモン会調べ、同書222頁より）

部 隊 名		人 員	帰還転出	戦没者	摘 要
第 六 師 団	師 団 司 令 部	495	297	198	熊 本
	第 6 師団歩兵団司令部	87	83	4	鹿 児 島
	歩 兵 第 13 聯 隊	7,778	3,227	4,551	熊 本
	歩 兵 第 23 聯 隊	5,968	1,262	4,706	宮 崎
	歩 兵 第 45 聯 隊	6,351	1,192	5,159	鹿 児 島
	騎 兵 第 6 聯 隊	544	121	423	熊 本
	野 砲 兵 第 6 聯 隊	5,462	2,478	2,984	〃
	工 兵 第 6 聯 隊	1,095	303	792	〃
	輜 重 兵 第 6 聯 隊	2,136	923	1,213	〃
	師 団 通 信 隊	291	127	164	〃
	師 団 衛 生 隊	990	631	359	〃
	兵 器 勤 務 隊	164	47	117	〃
	第 1 野 戦 病 院	256	165	91	〃
	第 2 野 戦 病 院	249	179	70	〃
	第 4 野 戦 病 院	257	183	74	〃
	病 馬 廠	117	101	16	〃
計		32,240	11,319	20,921	〃

備考 戦没者数は厚生省の調書及び参戦生存者の記憶等を参考資料としたが夫々の違いがあり、当時の戦闘並びに戦場の特性上確実性に乏しく推定の概数である。

風雲急を告げる昭和 18 年の午後六時頃、部隊長以下 1000 名の将兵が出動準備完了し四列縦隊に整列威風堂々海軍ラッパ吹奏にて宮門を出発、熊本駅まで市街を行進し家族並びに沿道の市民から盛大なる見送りを受けた。熊本駅から列車にて門司港着直ちに乗船、一路戦地に向かう。行先は全然不明である。内地を離れ船上の人となり一番心配な事は敵潜水艦の魚雷攻撃である。乗船と同時に救命胴衣とロープとタオル等が渡される。ロープは遭難した時イカダ組み用、タオルは海中での目印鉢巻き用であるとして渡された。又、上官から船上での注意等の制示があり将兵共前途に対する不安は誰も同じ、運命に任せる他に無い。しかし全員明るく元気旺盛である。一週間余り航海して最初に上陸した所は南洋群島パラオ港であった。このパラオ港で暫く熱術訓練等があるとのことで兵舎作りをしておりましたが、十日間余りで出発命令があり九月二十五日パラオ港より乗船出港する。乗船して初めて我が部隊の目的地がソロモン群島ブーゲンビル島第六師団補充部隊であることが判明した。乗船して四日目だったと記憶しております。明日は赤道を越えるとの事で赤道祭の話などがあっておりました。さて九月二十八日の早朝の事です。予て心配していた最悪の事態が発生したのです。突然船が大きなショックを受け、船が少し傾き始めた。

「さあ大変。」敵潜水艦の魚雷攻撃が命中したのである。私は大急ぎで雑嚢水筒帯剣を着装して上官のピーの警笛合図と同時に所定場所に駆け上がり、海中目掛けて飛び込んだのです。船を振り返り見上げると人、ロープ、いろいろの物資がずれ落ちている。魚雷は船尾に命中し船尾から沈み始め、船首は直立してスポーッと沈没したようでした。魚雷を受けて約二十分間位だったと思います。轟沈でした。私は船首の方に乗船していたのが幸運だったと思います。七千トン級輸送船も一瞬でした。数百名の将兵が海中に投げ出され木材や船のハツ板その他浮遊物等にしがみ付き、山になるかと思うと谷底になる大きな波うねりの中、負傷者あり又海酔いする者あり、その間突然嵐のようなスコールが滝のように降ってくる。お互いに勇気を出して軍歌の大合唱が始まる。お互いに鼓舞し合い助け合い全員必死に波との戦いである。島一つ見えない南海の大海原に約 11 時間余り漂い続け幸運にもボートに救助されたのです。

あの時の情景は五十年以上経過した今も脳に焼き付いています。同郷から一緒に出征した戦友伊倉町の庄本君の姿が見えない。昨日船上にて色々談笑して明日又会う約束をして別れたばかりであった。しかし船と運命を共にしたのであった。輸送船団は一時現場から離れていった。数時間後輸団の中の一隻が救助船として現場に引き返し生存者を救助して十月一日ラバウル港に裸同然で上陸した。上陸後、赤根岬という元第六師団の兵舎跡に宿営することとなった。赤椰子の葉で覆ったバラック建てである。暫く休養と準備等に駐屯することとなった。このニュープリテン島ラバウルは元ドイツの委任統治領であった。椰子の植林が実に見事です。樹齢百年以上と思われる大木で、海岸から見渡す限り奥地まで椰子林で覆われており、南洋の素晴らしい風景であった。隊がようやく落ち着いた頃「戦没者慰霊祭」が行われました。祭壇の墓標に七百八十七名の英霊と記してありました、この数字は強く印象に残り終生忘れることはありません。

熊本大江の十三連隊の宮庭から威風堂々戦地に向かった精鋭が、一ヶ月足らずで約八割近い将兵が戦死したことは誠に残念でなりません。最前線基地ラバウルは毎日のように敵機が百機、二百機と爆撃に空襲に来ておりました。我が空軍で有名な「ラバウル航空隊」も果敢に応戦、空中戦が毎日続きラバウルを死守しておりました。しかしラバウル航空隊は南洋諸島トラック島へ転戦になり空の守りは無くなりました。それからはラバウルの制空権制海権は敵の手中に移り敵の思うままになってしまいました。この状況では海上輸送は困難となり残念ながら日的地ブーゲンビル島第六師団に追急が出来なくなりました。救助された二百十三名は第十七師団五十三連隊に転属、ラバウル守備隊に編入される事になった。編入後は陣地構築、軍事演習であった。毎日が敵機の爆撃との戦いであった。又特に厄介な敵はマラリア蚊との戦いでもあった。朝点呼の時は必ず予防薬のアカリナミンキニーを飲むことになっており、一日中兵舎には蚊帳を吊っておりました。最大の敵は「マラリア病」で発熱していました。

ラバウルは孤立無援の状態となり、持久戦の覚悟で食料の自給自足のため農園を開墾し、カライモ、タビオカ等の栽培或いは製塩製油漁労班等が編成されていた。この地は赤道真下常夏の国で生活には余り不自由なことは無かったと思う。ラバウルの将兵は今村均大將指揮の下、陸軍海軍合わせ約十万の将兵が守備に着き全域が堅固な要塞と化しており何時敵が上陸しても防備は万全であると言われておりました。

何度か敵艦の艦砲射撃を受け敵の上陸かと思われる事態があり、又病人以外全員戦闘配備に着けの命令が発令されたが、幸い敵の上陸はありませんでした。もし敵の上陸があれば全員玉砕の命令が出されており我中隊も第一線、第二線、第三線まで後退して第三線のこの陣地で玉砕と中隊長から命令が出されておりました。再三軍事演習を繰り返し玉砕場所も決めておりました。このラバウルはニューギニア並びにソロモン群島への兵員武器弾薬輸送の最前線基地で「野戦倉庫」には物資が山積みされていた。

二十年七月頃より敵機の爆撃や銃撃が止み偵察機だけの状態が続き、戦友同士不思議に思う日が続いたのでした。二十年八月になり「中隊全員集合」の命令があり、宮庭に集合し中隊長から戦争が終結し終戦にあたり訓示があり初めて戦争終結を知った次第です。約二ヶ年間「ラバウル守備隊」の任務を終了し、昭和二十一年四月五日浦賀港に無事上陸、復員業務を完了し「召集解除」となり帰郷した次第であります。

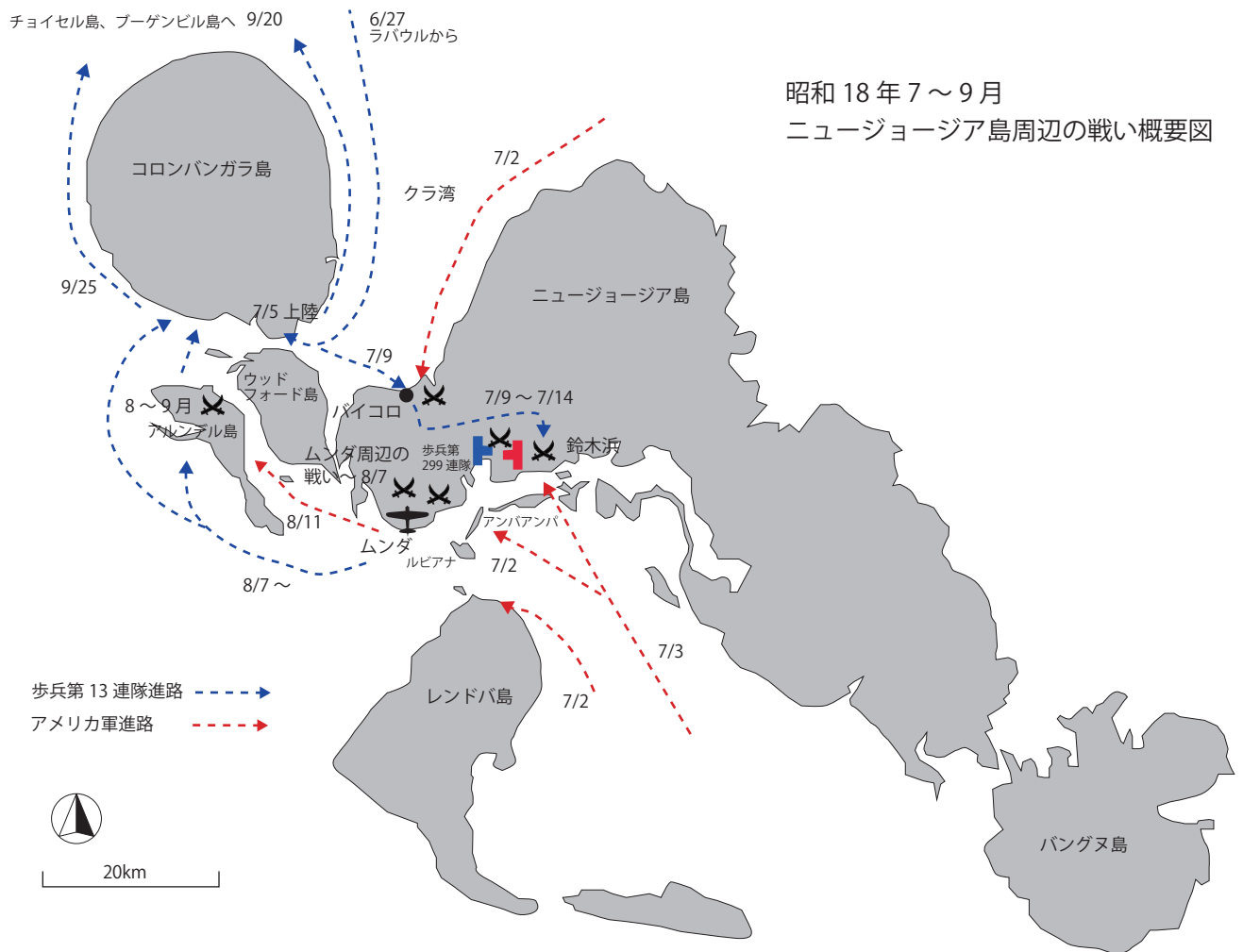
太平洋戦争時 日本陸軍第6師団歩兵第13連隊 中部ソロモンの戦いの概要



西太平洋全体図



ソロモン諸島周辺図



第 17 軍 ソロモン諸島方面作戦担当

第 6 師団 - 歩兵第 13 連隊 (熊本)
歩兵第 23 連隊 (都城)
歩兵第 45 連隊 (鹿児島)
野砲兵第 6 連隊、騎兵第 6 連隊
工兵第 6 連隊など
独立混成第 38 旅団 - 歩兵第 81 連隊など
その他砲兵、工兵、兵站部隊

※熊本日日新聞社 1970

『熊本兵団戦史 太平洋戦争編』の記述をもとに作成

歩兵第 13 連隊 昭和 18 年初頭での編成

連隊長 友成 敏 大佐
副官 宇屋嘉善 大尉

第 1 大隊長 木下西舟 少佐
第 1 中隊長 堀内令次 中尉
第 2 中隊長 坂井一郎 大尉
第 3 中隊長 中山 大尉
第 4 中隊長 伊藤三郎 中尉
機関銃中隊長 江川庸二 大尉

第 2 大隊長 小橋武雄 少佐
第 5 中隊長 木原正弘 大尉
第 6 中隊長 二子石亀馬 中尉
第 7 中隊長 永山一郎 中尉
第 8 中隊長 仁保正義 中尉
機関銃中隊長 金沢義正 中尉

第 3 大隊長 鷹林宇一 少佐
第 9 中隊長 新海 敬 中尉
第 10 中隊長 飯島宗助 中尉
第 11 中隊長 井上 務 中尉
第 12 中隊長 加島五郎 中尉
機関銃中隊長 岡田久吉 中尉

連隊砲中隊長 鏡内 明 中尉
速射砲中隊長 豊田倭一 中尉
通信班長 山口愛国 中尉



ニュージョージア島ムンダ飛行場
(<https://commons.wikimedia.org/wiki/File:MundaPointAirstripView.jpg=ja>)



ニュージョージア島の日本兵
(<https://commons.wikimedia.org/wiki/File:NewGeorgiaJapaneseSoldiers.jpg>)



ブーゲンビル島でのアメリカ兵
(© [https://commons.wikimedia.org/wiki/File:U.S._Soldiers_at_Bougainville_\(Solomon_Islands\)_March_1944.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:U.S._Soldiers_at_Bougainville_(Solomon_Islands)_March_1944.jpg))



ブーゲンビル島のブイン飛行場
(© https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Zuikaku_Zeros_at_Buin_1943_B.jpg)



ブーゲンビル島の戦い 第2次タロキナ作戦、プリアカ作戦 (昭和19～20年)の概要

S19.3/8 ~ 22
第2次タロキナ作戦

タロキナ岬

S19.11 ~ S20.4
プリアカ作戦

S20.6 ~ 8